



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

待降節第3主日 A年(2022年12月11日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：イザヤ書 35章1—6a、10節

第二朗読：ヤコブの手紙 5章7—10節

福音朗読：マタイによる福音書 11章2—11節

## 待つ喜び

待降節第三主日は、通称、「喜びの主日」と呼ばれます。「主にあつて喜び。重ねて言う、喜び。主は近づいておられる」(フィリ4章4-5節)と入祭唱で主の到来を喜びのうちに待ち望むことを宣言するからです。ところで、「喜ぶ」と日本語では訳されますが、ラテン語ではいくつかの表現があるようです。待降節第三主日の入祭唱での「喜び」は gaudete (ガウデーテ) です。この単語には「個人のレベルの心の安らぎ、安心感、穏やかさ、しみじみとした味わい」の意味が含まれています。今日のミサの最初のことば、「喜び」は、漠然とした不安の中に生きる人類に対して、救い主は必ず来られるから安心しなさい。喜んで待ちわびなさいと呼びかけているのです。ちなみに、今日の典礼の色は待降節の通常の色である紫に加えて、喜びを表すバラ色、またはピンク色を選ぶこともできます。

### 【あじわいのポイント】

今日の第一朗読には「喜び」、「喜ぶ」という表現が何度も登場します(1、2、6、10節:喜び踊れ、喜び、喜んで、喜び歌い、喜びと楽しみ)。ヘブライ語の原文を眺めてみると、それぞれ表現が異なるようです。厳密にはニュアンスが異なるようですが、ここでは、むしろすべて同じ意味だととらえたらよいでしょう。「[荒れ野と砂漠は]盛んに花を咲かせ、喜び歌う」(2節 新改訳改訂第3版)。荒れ野と荒地、砂漠に花が咲き乱れるように、神が創造された時のように、地は本来の姿へと回復していきます。1節にある「野ばらの花」は、翻訳によっては「サフラン」(新改訳改訂第3版)、「水仙」(フランシスコ会訳)となっています。

手が弱り、膝がよろめく人々に「雄々しくあれ。恐れるな。見よ、あなたたちの神を」(4節)と、呼びかけがあります。荒地を、一面に花咲く地へと変えてくださる神さまは、「見えない人の目を開き、聞こえない人の耳を開く」(5節)ことで人間の姿を変えてくださる神さまなのです。こうして、人間に「喜

びと楽しみ」(10節)が戻ってきます。喜びは神さまから来る、神さまの賜物なのです。

第二朗読では、短い朗読の箇所にもかかわらず3回も「忍耐しなさい」(マクロシューメオー)と繰り返されます。10節ではその名詞形が登場します(マクロシューミアー)。その意味は「不幸や困難の中でも不平を鳴らさずに心静かに待ち、忍耐する」だそうです(雨宮師の解説より)。

預言者を模範として、辛抱と忍耐を重ねたキリスト者(10節参照)は、雨を待ちわびる農夫のようです(7節参照)。「主が来られる時」(8節)まで「尊い実りを待つ」(7節)かのように忍耐をしています。主が来られる時は完成の時です。その時が来ることを知っている人は、「互いに不平を言わぬ」(9節)よう心がけながら、「心を強く保ちなさい」(8節 フランシスコ会訳)と言いきかせて待ち続けるのです。

今日の三つの朗読から何を喜びながら待ち続けているかが明らかになるでしょう。もちろんイエスさまの到来を待ち続けているのですが、実は、救い主であるイエスさまによって、人のあり方が変えられていくのを待ちわびているのです。その日がやって来るまで、第二朗読にあるように忍耐して、心を固く保ち続けなければならないでしょう。

## 説教

高齢者と暮らしていると興味深い発見が数々あります。わたしにとって不思議だと思うのは、おしなべて高齢の方々には待てないということです。待つのを極端に嫌がりますし、何かに時間がかかっているのがあまり好きではないようです。「時間はたっぷりある」とデンと構えることはまずなく、なぜ待たされるのかと腹を立てていることすらあるようです。

『サヨナラ』ダケガ人生ダ』と言ったのは井伏鱒二だだと思いましたが、それに倣って『マツ』コトダケガ人生』なのではないでしょうか。「待つ」時は時間の無駄ではありません。「待つ」時にわたしたちは人生のこれまでの歩みを振り返り、今の自分と出会い、未来の姿を思い描きます。しかも「待つ」時は相手に委ねる時です。自分の意のままに時間を使うのではなく、相手に身を任せる時です。「待つ」の意味を深めたのは太宰治です。名作「走れメロス」は「待つ」ことのすばらしさを教えてくれます。

「待つ身がつかないかね。待たせる身がつかないかね」と井伏鱒二の前で友人の檀一雄に太宰は語ったと言われています。「待つ」はとても嫌な時間かもしれません。しかし、「待たせている」相手にとってもつらい時間なのです。「待たせている」相手の気持ちをしっかりと受けとめ、喜びのうちに「待つ」時、二人の間柄は深まるのです。

戦時中、太宰は本当に短い一編の小説を残します。タイトルは「待つ」でした。「私は、誰を待っているのだろう」という主人公の独り言は、希望を失いかけた戦時下の人々のところを代弁しています。

主は来られる。という希望と喜びの中で降誕祭を待ち続けましょう。